第2章　対象者の逸脱行為、犯罪被害、生活上の不安

対象者の犯罪行為、不良行為、犯罪からの被害、および生活上の不安の実態を調査した。

調査の目的は、この研究プロジェクトの企画に示すように、青少年の発達に必要な生きがい感や、自分の能力に関わる効力感等の心理的特質を左右する要因として、これら逸脱的行為や犯罪被害、不安の有無・程度等との間に関係があることを想定しているためである。以下の各章でその関連が明らかにされる。

すなわちこの章に示す調査内容は、研究課題に即して対象者を分析するための外的基準を提供する為に実施した結果である。それゆえここで示す結果は、我が国青少年のこれら側面の実態を知ろうとしたものではない。ただし一方この調査結果は、これらの側面について、現在の我が国の青少年の実態を調査した各種調査結果と比較することによって、この調査の対象者になった者の特質を知ることが出来る。

1.不良行為の実態

不良行為として、ア．学校の授業をサボる（怠学）、イ．友達とゲームセンターで遊ぶ（ゲームセンター）ウ．ポルノ雑誌やアダルトビデオを見る（ポルノ雑誌、ビデオ）、エ．インタネットでアダルト番組を見る（インターネット、アダルト）、オ．たばこを吸う（タバコ）、カ．友達と酒を飲む（酒）、の6項目を提示し、過去1年間内での体験の有無を尋ねた。回答は、時々ある、1ー2度ある、ない、の3選択肢である。

結果は対象者の身分・男女の別に、表2－1に示した。

なお昨年総務庁青少年対策本部から「非行原因に関する総合的研究調査」（調査委員長は筆者）が発表されている。この結果（以下全国平均と呼ぶ）でみると例えば、怠学の経験なしの頻度は、中学、高校、大学生の順に、87、61、17％であり、今回対象者のそれが男女平均して中1年生82、中3年生70、高校2年生49、大学生11％であった。同様に例えばタバコ（先の順序で体験なしの全国平均率が、82、66、70％）や酒（同じく、80、40、6％）の体験率を見ても今回対象者のこれら不良体験率（表の結果を参照されたい）は、全国平均と大差がない。すなわち今回対象者は、細かく見れば全国平均と若干の違いはあるが、不良行為の体験に関しては、大凡全国平均に近く、特に偏った対象群ではない。

表２－１ 不良行為の頻度（%）

		中１ ない	中１ 1-2度	中１ 時々	中３ ない	中３ 1-2度	中３ 時々	高２ ない	高２ 1-2度	高２ 時々	大１ ない	大１ 1-2度	大１ 時々
怠学	男	84	12	4	72	16	13	54	23	23	11	28	61
	女	79	17	5	69	19	12	44	27	30	11	28	62
ｹﾞｰﾑ・ｾﾝﾀｰ	男	29	29	41	20	23	58	18	20	62	24	28	48
	女	32	29	39	39	28	34	20	23	57	31	33	36
ﾎﾟﾙﾉ雑誌 ﾋﾞﾃﾞｵ	男	75	16	9	25	31	44	19	23	58	15	18	67
	女	89	3	8	72	22	6	69	16	15	78	17	5
ｲﾝﾀｰﾈｯﾄ ｱﾀﾞﾙﾄ	男	96	1	3	93	3	4	85	8	7	80	9	11
	女	99	2	0	100	0	0	99	1	0	94	3	3
タバコ	男	84	13	3	75	10	16	66	10	25	62	10	29
	女	92	3	5	86	6	8	74	11	15	75	10	15
酒	男	96	1	3	63	17	20	28	24	48	13	13	74
	女	95	2	3	69	19	12	27	28	45	9	12	80

この不良行為として調査では6種類を調べたが、6種類全体を通して比較的体験の多い者と少ない者に対象者を分類することを試みた。すなわちこの分類によって、3章以下に示すような心理的な特質が分析される。

分類の基準としては、各項目で体験無しを1点、1－2度ありを2点、時々あったを3点とし、6項目の回答を合計した。全項目とも体験無しならば6点、全項目とも時々あれば18点になる。その合計点から、6－7点（6項目中1項目についてのみ1，2度体験している）を少ない群、8－12点を中間群、13点以上（6項目のほぼ全てを1、2度以上、さらに最低1項目は時々体験している）を多い群とすると、表2－2；不良行為の体験量分布が作られる。

表２－２不良行為の体験量分布（%）

	男 少ない 6-7点	男 中間 8-12点	男 多い 13点以上	女 少ない 6-7点	女 中間 8-12点	女 多い 13点以上
中学１年生	46.7	49.3	4.0	53.8	44.7	1.5
中学３年生	17.4	65.2	17.4	53.8	37.0	9.2
高校２年生	7.7	52.2	40.1	15.9	64.2	19.9
大学１年生	2.5	38.9	58.6	5.1	62.3	32.6

結果で見ると、不良行為とみなした6項目全体の体験率は、中1，中3，高2，大学と進むにつれて、男女とも急激に体験率が上昇する。すなわち男子では、中1はまだ不良行為が少ない（6項目中体験が1つ以下）が大勢だが、中3、高2になると中間群が大勢、さらに大学生は多い群（6項目の行為全てを複数回、内1項目以上をしばしば体験している）が大勢になる。

一方女子は中1から中3まではまだ少ないが大勢だが、高2、大学生になると中間群が大勢になる。

男女を比較すると、中学1年の内は男女で違いがないが、中学3年頃から男子の方が不良行為が多くなり、その傾向すなわち男子の方が格段に不良行為の多いことが高校、大学に進んでも変わらない。

2. 犯罪行為の実態

犯罪行為としては、ア、けんかをして、人をひどくなぐった（暴力）、イ、ファッションや護身用にナイフを持ち歩く（ナイフ所持）、ウ、道においてある他人の自転車やオートバイを乗りまわした（車盗用）、エ、店の品物を金を払わずに持ってきた（万引き）、の4項目を示して、過去1年間内の体験を尋ねた。

回答は、時々ある、1ー2度ある、ない、の3選択肢である。

結果は表2ー3に示した。

表２ー３ 犯罪行為の頻度（%）

		中１			中３			高２			大１		
		ない	1-2度	時々	ない	1-2度	時々	ない	1-2度	時々	ない	1-2度	時々
暴力	男	76	20	4	65	25	10	82	14	4	76	20	4
	女	91	8	2	88	5	8	93	4	3	91	8	2
ﾅｲﾌ所持	男	96	1	3	96	1	3	97	1	1	96	1	3
	女	97	2	2	97	3	0	99	1	1	97	2	2
車盗用	男	93	5	1	85	11	4	83	8	9	93	5	1
	女	99	2	0	95	2	3	90	4	6	99	2	0
万引き	男	93	5	1	69	16	16	81	12	7	93	5	0
	女	97	3	0	89	3	8	88	7	5	97	0	3

これらの体験率を先の全国調査の結果と比べたが、ここでも今回調査の対象者が特に偏ってはいなかった。

また各項目毎に、ないを1点、1ー2度を2点、時々ありを3点として、個人毎に4項目の得点を計算した。全てなければ4点、内1、2項目を体験すると5、6点、それ以上の体験があると7点以上に

なる。この得点によって対象者を分類すると、表2ー4になる。

表２ー４ 犯罪行為の体験量分布（%）

	男			女		
	無し 4 点	中間 5-6点	多い 7点以上	無し 4点	中間 5-6点	多い 7点以上
中学１年生	68.5	27.4	4.1	87.5	10.9	1.6
中学３年生	50.7	32.4	16.9	85.7	4.8	9.5
高校２年生	62.8	27.6	9.7	75.6	19.3	5.1
大学１年生	80.6	16.5	3.0	90.6	7.9	1.4

以上2つの表からは、次の傾向が見れる。

先ず男女とも最も犯罪行為の少ないのは大学生で、男子の8割、女子の9割は4項目とも無し（4点）である。次いでは中学1年生である。逆に比較的多いのは、男子は中学3年生（約半数が何らかの非行を行った）、女子は高校2年生（約4分の1が何らかの非行をしている）であった。非行として比較的多いのは、男子ではけんかの暴力（各学年とも3割前後）次いで万引き（中3で3割、高2で2割）である。女子で1割以上の体験があったのは、中学3年生でけんかと万引き、および高校2年で万引きがある。

3、犯罪被害の実態

犯罪からの被害としては、ア、街の中でおどされて金や物をとられた（恐喝）、イ、学校でいじめにあった（いじめ）、ウ、電車や人混みで痴漢の被害にあった（痴漢）の3項目で、回答はこれまで同様、ない、1ー2度、時々の3選択肢である。結果は表2ー5に示した。 また、ないを1点、1ー2度を2点、時々を3点として、3項目の得点分布は表2ー6に示した。

表２ー５ 犯罪被害の頻度（%）

		中１			中３			高２			大１		
		ない	1-2度	時々	ない	1-2度	時々	ない	1-2度	時々	ない	1-2度	時々
恐喝	男	95	5	0	92	8	0	83	14	3	95	5	0
	女	99	2	0	99	2	0	99	1	0	99	2	0
いじめ	男	81	12	7	85	11	4	97	2	1	81	12	7
	女	80	16	5	83	14	3	90	9	2	80	16	5
痴漢	男	97	1	1	97	3	0	99	1	1	97	1	1
	女	95	5	0	75	20	5	51	28	20	95	0	5

表2－6 犯罪被害の体験量分布（%）

	男			女		
	無し 3点	中間 4点	多い 5点以上	無し 3点	中間 4点	多い 5点以上
中学1年生	77.3	13.3	9.3	76.2	17.5	6.3
中学3年生	75.7	14.3	10.0	65.6	18.8	15.6
高校2年生	79.3	16.6	4.1	47.5	28.2	24.3
大学1年生	93.0	4.5	2.5	72.5	15.9	11.6

中1ではいじめの被害が2割前後ある他は、ほとんどない。中3ではいじめ被害が2割近い他に、女子では痴漢の被害が2割を超えている。高校2年ではいじめ被害は少なくなるが、女子で痴漢被害を5割が体験し、また男子は街中での恐喝被害を2割が体験している。以上はこれまでの全国調査等での結果と似通っている。ただし今回調査での大学生の場合、いじめ被害が2割程度あるが、この割合はこれまでの調査に比べやや高い。

3項目を合わせた点数でみると、3項目で何らかの被害あり（表で4点以上）は、男子では大学生で最も少なく1割以下、中・高生は2－3割いる。女子では高2で痴漢被害が特に多いためにそれを含めて5割程度、その他の学生・生徒では3－4割が何らかの被害を受けている。

4、生活上の犯罪等に対する不安

対象者が生活上、犯罪等に対する不安をどの程度持っているかを尋ねた。質問は　ア、自分の家が泥棒被害に会う（泥棒）、イ、住んでる地域を夜一人で歩いて被害に会う（夜の一人歩き；夜歩き）、ウ、住んでる地域でたかり、脅し、暴力被害にあう（地域内の犯罪被害）、エ、自分の学校でたかり、脅し、いじめの被害にあう（学校内の犯罪被害）、オ、押し売り、いんちき商品を売りつけられる（押し売り被害）、カ、家の人が交通事故にあう（家人の交通事故；交通事故）、キ、住んでる地域に変質者・浮浪者がうろつく（地域の変質者；変質者）、ク、住んでるちいきに空気の汚れや騒音などの公害が発生する（地域の公害被害；公害）、の8項目である。

回答は、なし、やや不安、非常に不安、の3選択肢である。結果は表2－7にまとめた。また、各項目で不安なしを1点、やや不安を2点、非常に不安を3点として、個人毎に得点を計算した。8項目あるので、最低が8点（全項目に対して不安無し）、最高が24点（全ての項目に対して非常に不

安あり)となる。その得点から不安が低い(8ー10点)、中間(11ー16点)、高い(17点以上)とすると、表2ー8になる。

表2ー7 生活上の不安(%)

		中1 なし	中1 やや不安	中1 非常に不安	中3 なし	中3 やや不安	中3 非常に不安	高2 なし	高2 やや不安	高2 非常に不安	大1 なし	大1 やや不安	大1 非常に不安
泥棒	男	37	43	20	45	29	26	67	27	6	37	43	20
	女	35	48	17	37	46	17	51	41	7	35	48	17
夜の一人歩き	男	53	28	19	52	37	11	69	23	8	53	28	19
	女	41	40	20	28	52	20	41	41	18	40	40	20
地域内で犯罪被害	男	65	20	15	60	25	15	55	32	13	65	20	15
	女	52	35	12	55	29	15	59	30	11	52	35	12
学校内で犯罪被害	男	64	27	9	62	26	12	80	18	2	64	27	9
	女	48	35	17	55	31	15	72	22	6	48	35	17
押し売り被害	男	59	27	15	56	38	6	75	21	4	59	27	15
	女	54	40	6	54	31	15	72	22	6	54	40	6
家人の交通事故	男	29	37	33	37	36	27	37	41	21	29	37	33
	女	25	31	45	20	29	51	27	40	33	25	31	45
地域の変質者	男	49	37	13	52	34	14	59	35	7	49	37	13
	女	25	39	37	19	45	36	29	45	26	25	39	37
地域の公害被害	男	44	29	27	40	25	36	39	37	24	44	29	27
	女	31	37	32	28	32	40	35	45	21	31	37	32

表2ー8 生活上の不安量分布(%)

	男 低い 8-10点	男 中間 11-16点	男 高い 17点以上	女 低い 8-10点	女 中間 11-16点	女 高い 17点以上
中学1年生	26.7	49.3	24.0	24.6	45.4	40.0
中学3年生	31.5	45.2	23.3	7.8	64.1	28.1
高校2年生	41.4	43.4	15.2	24.3	54.3	21.4
大学1年生	43.5	48.0	8.5	20.3	68.1	11.6

以上の結果を見ると、次の傾向がある。男子の場合これら生活上の不安は、中学、高校、大学と学年が進に連れて、不安の低い者が増え、不安の高い者の割合が減っている。すなわち全体として、年齢増加によって不安の全体量が減っている。一方女子の場合は学年の進に連れて、不安の高い者は減るが、低い者の割合は中3が極端に少ない他は同じ程度である。全体として中1と中3は同じ程度で、高2、大1と進とやや不安が減る。

また男子に比べて女子はどの学年でも、不安を示す者が多い。

不安の内容としては、やや不安と非常に不安の割合を合計して、各学年・性別に高い順に並べると表2ー9になる。ただし合計が50%を超える項目に限った。

表2ー9　生活上の不安の対象（ 50 %以上）、（ ）内は%

	中1		中3		高2		大1	
	男	女	男	女	男	女	男	女
1位	交通事故 (71)	交通事故 (75)	交通事故 (71)	変質者 (81)	交通事故 (63)	交通事故 (73)	交通事故 (71)	交通事故 (75)
2位	泥棒 (63)	変質者 (75)	公害 (60)	交通事故 (80)	公害 (61)	変質者 (71)	泥棒 (63)	変質者 (75)
3位	公害 (56)	公害 (69)	泥棒 (55)	公害 (72)		公害 (65)	公害 (56)	公害 (69)
4位		泥棒 (65)		夜歩き (72)		夜歩き (59)	変質者 (51)	泥棒 (65)
5位		夜歩き (69)		泥棒 (63)				夜歩き (60)

全体を通じてどの学年・男女とも高いのは、家人の交通事故への不安である。次いで男子全体では、公害と泥棒に対する不安である。一方女子全体では、地域内で変質者がうろつくこと、その次に公害への不安になる。その他女子では、夜の一人歩き、泥棒への不安も全体では50%を超えている。

5、青少年の生きがいや、効力感に対する外的基準の設定

初めに述べたように、この章で示した対象者の逸脱行為等の実態調査は、その結果を利用して対象者の分類基準すなわち外的基準を作成し、若者の生きがいや効力感等との関連を分析するために実施したものである。簡単に言って、ここで調べた逸脱行為等の多少・高低の別によって、若者の生きがい等の高低が左右されている、あるいはその関係が逆転して、逸脱行為等の発生が生きがい感等の高低・有無の別によって左右されていることを明らかにしようとしている。

そこでここで調べた逸脱行為等の別で、対象者を分類することにする。分類は、ある行為・不安が多いか・高いか、少ないか・低いか、その中間か、の3段階とする。その場合、学年・性別を無視して、同一の分類とするか否かが問われる。これまで調査結果を示したように、調査課題の別によって、学年・性別で回答が大きく異なる課題があるからである。

ここでは4種の調査課題があった。1は不良行為、2は犯罪行為、3は犯罪被害、4は生活上の不安の程度、である。このうち、2の犯罪行為と3の犯罪被害は、学年・性別で回答分布に大差がない。そこでこの2つの行為を外的基準として対象者を分析する場合は、先に示した表2ー2;犯罪行為の体験量分布と、表2ー4;犯罪被害の体験量分布の作表基準をそのまま外的基準とした。

その一方不良行為と生活上の不安の程度は、学年・性別で分布が大きく異なる。これら2種については、学年・性別で異なる外的基準を設けた。基準の作成は、まず3段階として、各段階に対象者がなるたけ同数づつ分散することを目指した。

結果として、4つの課題の別に設けた外的基準は次のようである。

(1)不良行為の体験量による外的基準;

表2ー10のように定めた。なお各セルに対象者の人数を示した。

表２ー１０ 不良行為の体験量による対象者分類の外的基準と（ ）内は人数

	男			女		
	少ない	中間	多い	少ない	中間	多い
中学１年生	６点 （２１）	７ー８点 （２９）	９点以上 （２５）	６点 （１９）	７ー８点 （３１）	９点以上 （１５）
中学３年生	６ー８、 （１９）	９ー１０、 （２６）	１１点以上 （２４）	６点 （１７）	７ー８点 （２５）	９点以上 （２３）
高校２年生	６ー１０、 （５４）	１１ー１３、 （４９）	１４点以上 （３９）	６ー８、 （５０）	９ー１１、 （６７）	１２点以上 （５９）
大学１年生	６ー１１、 （５２）	１２ー１４、 （９２）	１５点以上 （５４）	６ー１０、 （５６）	１１点 （２９）	１２点以上 （５２）

(2)犯罪行為の外的基準は、先に示した表2ー2の分類と同じでなので、ここでは基準だけ録し、対象者数は採録しない。

表2ー11;犯罪行為の体験量による外的基準:全員共通

1、無し(4種の犯罪体験全てなし)

2、中間(4種の犯罪中、1、2を少数回体験している)

3、多い(以上よりも体験量が多い)

(3)犯罪被害の外的基準は、表2ー4の分類と同一で、以下のようである。

表2ー12;犯罪被害体験量による外的基準:全員共通

1、無し(3種の被害全てなし)

2、中間(3種の被害中1つあり)

3、多い(以上よりの体験している)

(4)生活上の不安の高低に関する外的基準

表2ー13のように定めた。なお各セルに対象者の人数を記入した。

表２ー１３　生活上の不安の高低による対象者分類の外的基準と（ ）内は人数

	男			女		
	低い	中間	高い	低い	中間	高い
中学１年生	8ー１０、（２０）	１１ー１５、（３２）	１６点以上（２３）	8ー１１、（２０）	１２ー１７、（２６）	１８点以上（１９）
中学３年生	8ー１０（２３）	１１ー１５（２４）	１６点以上（２６）	8ー１２、（１９）	１３ー１６、（２７）	１７点以上（１８）
高校２年生	8ー９ 、（４２）	１０ー１２、（５２）	１３点以上（５１）	8ー１１（６３）	１２ー１５（５９）	１６点以上（５１）
大学１年生	8ー９（６０）	１０ー１２、（８１）	１３点以上（５９）	8ー１１、（４７）	１２ー１４、（４７）	１５ 以上（４４）

まとめ;

この章では、調査の対象者について、不良行為、犯罪行為、犯罪からの被害、生活上の不安の4つの側面に関して調査した結果を示した。

結果をこれまでの調査と比較してみて、これら対象者は我が国の青少年の中で特別偏ったサンプルではないと見られた。

不良行為は年長ほど多くなること、男子は女子よりも多いこと、その他年齢・学年別に見た特徴が示された。犯罪行為は男子は中学3年生で、女子は高校2年生で比較的多い。中・高生では、けんかと万引きが比較的多い。 犯罪からの被害は、中学1年生ではいじめが目立つが、中学3年生ではいじめの他に、女子で痴漢被害が多くなる。高校2年生ではいじめ被害は少ないが、女子の痴漢被害と男子では街中での恐喝被害が多い。

生活上の不安あるいは安全感は、年齢によって異なる。低年齢では不安感が高い。また男子よりも女子で不安感が高い。不安の内容としては、家人が交通事故に会う不安、次いで公害への不安が男女・年齢に関係なく高い他に、男子では家に泥棒が入る不安、女子では地域の変質者への不安と、夜一人歩きする時の不安を回答する者が多かった。

ここで調査した不良行為、犯罪行為、犯罪被害、生活上の不安の4側面の多少・高低によって、若者の生きがい感や効力感等が異なるか否かが本調査の目的である。そこで各側面について対象者を分類する外的基準を設けた。その基準は表10から13に示した。

以下の各章では、この基準に従って対象者が分類され、問題にしている心理的側面との関連が分析される。

文献:

非行原因に関する総合的研究調査(第3回) 総務庁青少年対策本部 1999,3